

『近代法思想史入門』HP 資料の補足追加修正（2022年3月22日）

① 本書全体と各章にかかわる参考文献として追加・補足（本補足追加修正3頁以下）

② 各章に本文・参考文献について、以下を訂正

第1章について

7頁5行目 さまざまな政策 → そのさまざまな政策

第2章について

38頁、フリードリヒ・ヘーゲル

第3章について

56頁 板垣退助監修、遠山茂樹・佐藤誠朗校訂『自由党史』

57頁 ルソー（本田喜代治・平岡昇訳）『人民不平等起源論』岩波文庫、1972年

第4章について

69頁12行目の「グナイスト講義」→「上述のグナイスト講義」

第5章について

89頁17行目 「国体に関する異説」は、 → 「国体に関する異説」によれば

108頁「ボワソナード」→「ボワソナード—日本近代法の父—」

第7章について

111頁8行目 （責任主義77—82条）③ → （責任主義77—82頁）、③

111頁 下から5行目 旧刑法典には、後にマルクス主義法学の…

120頁下から3行目 仏教的思想と → 仏教的思想（小野自身は浄土真宗の信者）と

121頁17行目 打ち出し始める（・・・） → 打ち出し始める（・・・）（それ以前の判例評釈から始まっているとする論者もいる）

122頁上4行目 1940年以後である → 1940年頃からである

第8章について

139頁 第3段落4行目 生田の助言と協力により同年、『青鞥』は誕生…

140頁 上から2行目 与謝野は男性による庇護や国家による母性保護を…

142頁下から6～5行目 …らの活躍により → …らの活躍による

#### 第9章について

150 頁 28 行目 等価関係をも → 等価関係も

151 頁 下から 6 行目 1873 年の「日本坑法」…

163 頁 上から 5 行目 同時にマルクス主義研究も世に出ている → 世に出している

#### 第10章について

171 頁 上から 2 行目・8 行目 常設委任統治委員会

#### 第11章について

196 頁 下から 2 行目 「そして、議会は、天皇とともに」 → 「そして、議会は、天皇とともに」

#### 第12章について

220 頁 下から 4 行目 削る

※下から 3 行目に同じ文献があるため。

#### 第13章について

232 頁 12 行目

(誤) 革新政治がドイツの全体主義とが決定的に異なるところは、

(正) 革新政治がドイツの全体主義と決定的に異なるところは、

234 頁 12 行目

(誤) よって翼賛運動を批判しようとする型」であるとする。

(正) よつて翼賛運動を批判しようとする型」(『国防国家の理論』14 頁)であるとする。

236 頁 16 行目から 17 行目

(誤) 憲法制定権力を有すものは

(正) 憲法制定権力を有するものは

#### 第14章について

242 頁下から 4 行目 という意味があった。 → という意味があった(第9章も参照)。

256 頁

(誤) 黒田覚『日本憲法論(上)』弘文堂書房、1940年

(正) 黒田覚『日本憲法論(中)』弘文堂書房、1937年(近デジ)

第15章について

264頁3行目 『美濃部達吉・・・』 → 家永『美濃部・・・』

275頁

(誤) 長尾龍一『日本憲法思想史』講談社、1996年

(正) 長尾龍一『日本憲法思想史』講談社学術文庫、1996年

●近代法思想史入門、文献の追加・補足

本書全体にかかわる参考文献として、以下を追加

米原謙編著『「天皇」から「民主主義」まで』晃洋書房、2016年

第1章について、以下を追加

- \*大竹秀男・牧英正編『日本法制史』、青林叢書、1975年
- \*瀧川政次郎『法制史論叢第一冊』角川書店、1967年
- \*高柳眞三「ノリ(法)の意味と意識(一)」『法学』第十三卷第九・十號、一頁以下
- \*『論語』子路篇「子曰、君子喻於義、小人喻於利」。藤原惺窩『寸鉄録』（『日本思想体系28』岩波書店1975）26:『大学要略』（『大学』（伝十章「此謂國不以利爲、以義爲利也。長國家而務財用者、必自小人矣。彼爲善之。」）の解釈（76-77）\*）『大学』では、国家に長として財用を務むる者は、必ず小人に自る。小人をして国家をめしむれば、害ならび至る。と続く。林羅山(1583-1657)『春鑑抄』（『日本思想体系28』130:論語里仁第四16、『三徳抄』（175）（朱熹『大学或門』1b-11或門盤之有銘「人之有是徳、猶其有是身也。徳之本明、猶其身之本潔也。徳之明而利欲昏之、猶身之潔而塵垢汚之也」の解釈。）
- \*小倉紀蔵『入門朱子学と陽明学』ちくま新書、2012年
- \*揖斐高『江戸幕府と儒学者』中公新書、2014
- \*高島元洋「日本朱子学論」『近世日本の儒教思想』御茶の水書房、2014年
- \*土田健次郎『江戸の朱子学』筑摩書房、2014年
- \*和島芳男『日本宋学史の研究（増補版）』吉川弘文館、1988年
- \*小島毅『朱子学と陽明学』ちくま学芸文庫、2013年
- \*菅野覚明『神道の逆襲』講談社現代新書、2013年
- \*西嶋定生『古代東アジア世界と日本』、岩波現代文庫、2000年
- \*熊沢蕃山「中庸小解」『蕃山全集』第三冊、名著出版、1979年
- \*貝原益軒「五常訓」『日本思想体系53』岩波書店1973年、128頁。『論語憲問』第十四十三「見利思義」の解釈。なお羅山『春鑑抄』130\*）『武訓』
- \*荻生徂徠「論語徴」『荻生徂徠全集3』みすず書房、1977年、516頁
- \*海保青陵「稽古談」『海保青陵全集』八千代出版、1976年、15、22-23頁
- \*山鹿素行「聖教要録」『日本思想体系32』12頁

- \*伊藤仁斎『童子問』岩波文庫、1935年、12頁
- \*石田梅岩『都鄙問答』岩波文庫、1935年、51-68頁
- \*山片蟠桃「夢の世」『日本思想体系43』、1973年、431頁
- \*二宮尊徳「夜話」『日本思想体系52』1973年、123、222頁
- \*藤田幽谷「丁己封事」『日本思想体系53』27頁
- \*小泉仰『西周と欧米思想との出会い』三嶺書房、1989年
- \*蓮沼啓介『西周に於ける哲学の成立』有斐閣、1987年
- \*菅原光『西周の政治思想』ペリかん社、2009年
- \*大久保利謙編『津田真道 研究と伝記』みすず書房、1997年
- \*佐々木克『幕末史』ちくま新書、2014年
- \*田尻裕一郎『江戸の思想史』中公新書、2011年
- \*大槻文彦『箕作麟祥君傳』、丸善、1907年、88-89頁。漢学者にたずねても答えはなく、新造語は「そのような熟語はない」と許されなかったという。
- \*周圓「丁臈良の生涯と『万国公法』漢訳の史的背景」『一橋法学』第9巻第3号、二〇一〇年、257-294頁
- \*吉田曠二『加藤弘之の研究』、新生社、1976年
- \*的野半介『江藤南白』(下)1914年、南白顕彰会、106
- \*大槻文彦『箕作麟祥君傳』88頁
- \*山下正夫「権利と正義」上山春平編『國家と價值』、京都大学人文科学研究所、1984年所収
- \*『論語憲問』第十四 十三「見利思義」の解釈。なお羅山『春鑑抄』130\*)『武訓』
- \*小泉仰「『原法堤綱』における西周の権利思想」『北東アジア研究』第14.15合併号(2008年) 87以下
- \*マイニア「西周の法概念論」『法哲学年報1970』有斐閣、1871年
- \*同「西洋法思想の継受」、東京大學出版会、1971
- \*大橋智之輔「西周における法と社会」『法理学の諸問題』有斐閣、1976年所収
- \*前田論文は、福澤「通俗民権論」明治11年では、権理を封建法以来の権利意識(主人の権理など)、権利を近代的権利意識に使い分けしているとする。
- \*安西敏三『福沢諭吉と西欧思想』名古屋大学出版会、1995年
- \*「権理」の用例について『日本近代思想体系 憲法構想』から憲法関係のほかの例を拾ってみると、新庄厚信ほか「国会開設願望の建言依頼書草稿」(1879明治12年)、松村辯二郎「国会開設の儀」(1880明治13年)が「権理」。一方、沢辺正修「国約憲法制定懇願書」(1880明治13年)は「権利」。私擬憲法案では多くが「権理」を用いている。「鷗鳴社憲法草案」(1789明治12年)、小田為綱ほか「憲法草稿評林」(1880明治13年)、沢辺正修「大日本国憲法」(1880明治13年)、千葉卓三郎ほか「日本帝国憲法(五日市憲法草案)」1881明治14年、植木枝盛「日本国国憲案」(1881明治14年)。ただし「交詢社憲法

案」(その解説である伊藤欽亮「私擬憲法註解」1881明治14年、同180頁)は、「民権」とともに「権理」を用いる。草案ではないが、天賦人權説に立ち、発禁処分を受けた笹島吉太郎「国民合約論」(1880明治13年)は、個別の「権利」とならんで、「自由ヲ貴ビ權利ヲ重ンズル」、「権理自由」の用例がある。なお井上毅による「岩倉具視憲法大綱領」(1881明治14年)などは「権利」を用いる。

\* 諸橋徹次『大漢和辞典』修訂第二、大修館書店、2000年

\* 鈴木修次『日本漢語と中国』中公新書、1981年

\* 柳父章『翻訳後成立事情』岩波新書、1982年

\* 山田洸『言葉の思想史』花伝社、1989年

\* 古田裕清『翻訳後としての日本の法律用語』中央大学出版部、2004年

\* 野田良之「明治初年におけるフランス法の研究」、『日仏法学』第一巻

\* 中田馨「仏蘭西法輸入ノ先駆」、1916大正5年、『論集第三巻』

\* 田中耕太郎「ボアソナードの法律哲学」1939年、『続・世界法の理論(下)』有斐閣、1972年、所収547-589

\* 『ボアソナード・梅謙次郎没後100周年記念冊子』(上)(下)、法政大学、2015年

\* ヘーゲル、三浦和男ほか訳『法権利の哲学あるいは自然的法権利および国家学の基本スケッチ』未知谷、1991年

\* ハンナ・アーレント『イェルサレムのアイヒマン』

\* ダンドレーヴ『自然法』久保正幡訳、岩波書店、1952年

\* ヨハネス・メスナー『自然法』水波・栗城・野尻訳、創文社1995年(原著1965年)

\* 気に汚されない性が天理とされる。天理については程顥(1032-1085)が体得したが、「性即理」は弟程頤(1033-1107)が定立し、朱熹(1130-1200)が継承した。『河南程氏遺書』卷二二上。小島毅『朱子学と陽明学』ちくま学芸文庫、2013年、86頁。ここでの性には本然の性と氣質の性があり、本然の性が理にあたる。なお孟子と対立する性悪説の法家荀子(BC313?-BC238?)『荀子』卷十六「正名」篇第二十二(『荀子』(下)、金谷治訳注、岩波文庫、1962年163頁)、無為自然の道家莊子(BC369-BC286)(『莊子雑篇』庚桑楚篇十)。

\* ベンサム立法論の邦訳は、『民法論綱』(訳1876明治9年)、『刑法論綱』(林訳1877-79明治10-12年)、『立法論綱』(島田三郎訳1878明治11年)として、『憲法典の原理』が『憲法論綱』(島田三郎訳、佐藤覚四郎訳1882明治15年)として、続けて訳された。主権論争の時期には『統治論断片』が『政治真論 一名・主権辯妄』(藤田四郎訳、1882明治15年)がある。

\* 古田裕清『翻訳語としての日本の法律用語』第9講によると、日本語の「所有」は、孟子公孫丑下「以其所有、易其所無者」という、「持っている(余っている)ものを、それを持たない者と交易する」という商いの説明などにある漢語を、民法編纂にあたりEigentumに借用した造語とされる。それにあたる言葉はすでに加藤弘之『立憲政体畧』

(各民所有の物を自由に売買するの権利) 廿六) や、フィッセリング『泰西国法論』(其所有の物を自在にする権、『津田真道全集』上、144) に見られる。なお『性法略』では「私有ノ権」とする。

\* 桂木隆夫『慈悲と正直の公共哲学』慶應義塾大学出版会、2014年

\* 村岡典嗣著、前田勉編『新編日本思想史研究—村岡典嗣論文選—』平凡社、2004年

第2章について、以下を追加

\* Summa Decretorum Magistri Rufini, Prima Pars. Distinctio I., Heinrich Singer (hrsg.), Rufinus von Bologna, Summa Decretorum, Paderborn, 1902 (Neudruck, Scientia, 1963)

\* Huguccio, Summa Decretorum, 1187-1190 \* 山内志朗『普遍論争』平凡社、2008年

\* オリヴァー・リーマン『イスラム哲学への扉』中村廣治郎訳、ちくま学芸文庫、2002年

\* 小川浩三「中世法学から見たホッブズ」、金山直樹編『法における歴史と解釈』、法政大学出版社、2003年、13頁以下

\* 小林公「清貧と所有」『立教法学』17号、1978年、129-200頁、「オッカムにおける神と自然法」『立教法学』21号、1983年、46-129頁

\* 堀米庸三『正統と異端』中公新書、1964年

\* 青柳かおり「イングランド国教会と非国教徒」甚野尚志・踊共二編著『中近世ヨーロッパの宗教と政治』ミネルヴァ書房、2014年所収

\* J. W. ガフ『ジョン・ロックの政治哲学』、宮下輝男訳、人間の科学社、1976年

\* ジュリアン・H・フランクリン『ジョン・ロックと主権理論』今中・渡辺訳、御茶の水書房、1980年

\* C. B. マクファーソン『所有的個人主義の政治理論』、藤野・将積・瀬沼訳、合同出版、1980年 \* 青木裕子「思想史における所有概念の政治的・哲学的蓋然性」『武蔵野大学政治経済研究所年報』第6号、2012年、23-66

\* 作田啓一『増補ルソー』筑摩書房、1992年

\* エルンスト・カッシーラー『ジャン・ジャック・ルソー問題』生松敬三訳、みすず書房、1997年

\* 同『十八世紀の精神』原芳男訳、思索社

\* Robert Wokler, Rousseau's Puffendorf, Natural Law and the foundations of commercial society, , 1994, in: Knud Haakonssen (ed.), Grotius, Pufendorf and modern natural law, Ashgate, 1999, p/ 437-466.

\* 三島淑臣『理性法思想の成立』成文堂、1998年

\* 滝口清栄「自然・労働・社会」加藤尚武編『ヘーゲル読本』法政大学出版会、1987年所収

\* Yoichi Kubo, Seiichi Yamaguchi, Lothar Knatz (Hg.), Hegel in Japan, , 2015, Litt

Verlag. \*西尾孝司『増訂イギリス功利主義の政治思想』八千代出版、1981年  
\*小畑俊太郎『ベンサムとイングランド国制』慶應義塾大学出版会、2013年  
\*児玉聡『功利と直観』勁草書房、2010年

第3章について、以下を追加

\*大久保利謙「五ヶ条の誓文に関する一考察」1957年『大久保利謙歴史著作集 1 明治維新の政治過程』、吉川弘文館、1986年、第2章

\*源了圓「漢町・維新时期における『海国図志』の受容」国際日本文化研究センター、1993年

\*荒川紘「横井小楠の教育・政治思想」『東邦学誌』40-1、2011年、101頁以下

\*井上勲「幕末維新时期における『公議輿論』概念の諸相」『思想』1975-3、岩波書店、66頁以下

\*松沢弘陽「公議輿論と討論のあいだ」『北大法学論集』49巻5・6号、1991年

\*尾藤正英「明治維新と武士」『江戸時代とは何か』、岩波書店、1992年、162頁以下

\*門松秀樹『明治維新と幕臣』中公新書、2014年

\*沢目健介「西周と同時代」『北東アジア研究』第14・15合併号103頁以下、2008年 \*坂野潤治『近代日本とアジア』ちくま学芸文庫、2013年

\*飯田鼎「自由民権思想における福沢諭吉と加藤弘之」『三田学会雑誌』95-3、2002、1以下

\*井上琢智「幕末・明治ロンドン日本留学生と日本学生会」2004年、『関西学院大学経済学論究』58 (1) 37-55

\*同「明六社と共存同衆」柚木学『近代化の諸相』清文社、1992年所収

\*矢田一男「法律学者としての馬場辰猪」『一橋論叢』55 (4) 535-553

\*Nick O'brien (2005) 'Something older than law itself' : Sir Henry Maine, Niebuhr, and 'the path not chosen', The Journal of Legal History, 26:3, 229-251.

\*大野達司「自治と自由」名和田是彦編著『社会国家・中間団体・市民権』法政大学出版局、2007年 (124-159)

\*森一貫「『天賦人權』思想と『天』の概念」1976年『阪大法学』97・98 (231-248)

\*山下重一「明治初期におけるスペンサーの受容」『年報政治学 日本における西欧政治思想』岩波書店、1975年、77-112

\*森一貫「『天賦人權』と『優勝劣敗』」日本近代法制史研究会編『日本近代国家の法構造』木鐸社、1983年、466

\*飯田鼎「福沢諭吉と兆民・辰猪」1997年、『近代日本研究』14 (79-111)

\*所功「『教育勅語』の成立と展開」2011年、『産大法学』44(4)、48-107

\*西川誠「木戸孝允と宮中問題」沼田哲編『明治天皇と政治家群像』、29頁以下

\*森川輝紀「元田永孚と教学論」『埼玉大学紀要教育学部』59 (1) 、2010年、133-154頁

\*柳愛林「エドモンド・バークと明治日本」2014年、『国家学会雑誌』127 (9・10)

\*礪川全次『日本保守思想のアポリア』批評社、2013年

\*C. B. マクファースン (谷川昌幸訳) 『バーク』御茶の水書房、1988年

\*森元哲夫「エドモンド・バーク著『新ホイッグ党員から旧ホイッグ党員への訴え』について」『法政研究 (九州大学) 』35 (4) 、1969年、513-533頁

\*山下重一「バークの本邦初訳」(一) (二完)、1980年、1981年『國學院法学』18-1・

55以下、18-2・53以下

- \* 吉田傑俊『福沢諭吉と中江兆民』大月書店、2008年
- \* ジャン・スタロヴァンスキー（山路昭訳）『ルソー 透明と障害』みすず書房、1993年
- \* 礪川全次『日本保守思想のアポリア』批評社、2013年
- \* 荒川紘「横井小楠の教育・政治思想」『東邦学誌』40-1、2011年
- \* 澤大海『共存同衆の生成』青山社、1995年
- \* 同「明六社と共存同衆」柚木学『近代化の諸相』清文社、1992年所収
- \* 同『共存同衆の進展と影響』東海大学出版会、1995年
- \* 萩原延壽『馬場辰猪』中公文庫、1995年。安永梧郎『馬場辰猪』みすず書房、1987年
- \* 戒能通弘『近代英米法思想の展開』ミネルヴァ書房、2013年
- \* 矢崎光圀『法思想の世界』塙新書、1996年
- \* 萩原隆『天賦人權論と功利主義』新評論、1996
- \* 吉井蒼生夫『小野梓』2003年、早稲田大学出版会
- \* 米原謙『国体論はなぜ生まれたか』ミネルヴァ書房、2015年
- \* 池田勇太『維新変革と儒教的理想主義』山川出版社、2013年
- \* 高瀬暢彦編著『金子堅太郎『政治論略』研究』日本精神文化研究所、2000年
- \* 源了圓「漠町・維新时期における『海国図志』の受容」国際日本文化研究センター、1993年
- \* 岡田千昭『本居宣長の研究』、吉川弘文堂、2006年
- \* 尾佐竹猛「公議輿論」『明治維新』（下）、白揚社、1949年
- \* 尾藤正英「明治維新と武士」『江戸時代とは何か』、岩波書店、1992年
- \* 後藤・家永・庄司・下山編『資料日本社会運動史第一巻自由民権思想』青木書店、1968年
- \* 佐々木毅・金泰昌編『公共哲学1 公と私の思想史』東京大学出版会、2001年
- \* 尾藤正英「明治維新と武士」『江戸時代とは何か』岩波現代文庫、2006年

第4章について、以下を追加

- \* 水口憲人「地方自治と民主主義」『政策科学』7巻3号、  
[http://www.ps.ritsumei.ac.jp/assoc/policy\\_science/073/073\\_21\\_mizuguchi.pdf](http://www.ps.ritsumei.ac.jp/assoc/policy_science/073/073_21_mizuguchi.pdf)
- \* 出原政雄『自由民権期の政治思想』法律文化社、1995年
- \* 福井純子「蘇峰が読んだトクヴィル」(1)『言語文化研究（立命館大学）』11巻3号、  
279頁以下に翻訳や言及の一覧がある。
- \* 松本礼二『トクヴィル研究』東京大学出版会、1991年
- \* 宇野重規『デモクラシーを生きる』創文社、1998年
- \* 同『トクヴィル』講談社、2010年
- \* 高山裕二『トクヴィルの憂鬱』白水社、2012年

- \* 矢野祐子「ボアソナードの憲法構想」1994年『法制史研究』44、橋本誠一による書評、  
『法制史研究』46
- \* 江村栄一編『自由民権と明治憲法』吉川弘文館、1995年
- \* 鈴木修次『日本漢語と中国』中央公論社、1981年
- \* 栗城壽夫「ヘルマン・シュルツェの憲法理論」『一九世紀ドイツ憲法理論の研究』、信  
山社、1997年
- \* 安世舟「明治初期におけるドイツ国家思想の受容に関する一考察」『年報政治学 日本  
における西欧政治思想』、1975年
- \* 山田央子「ブルンチュリと近代日本政治思想」、『東京都立大学法学会雑誌』32巻2号  
125以下、33巻1号221以下
- \* 江村英一『自由民権革命の研究』法政大学出版、1984、宮川・中村・古田編『近代日本  
思想論争』。山田央子（下）232
- \* 森一貫「『天賦人権』思想と『天』の概念」1976年『阪大法学』（97・98）231-248
- \* 森一貫「『天賦人権』と『優勝劣敗』」日本近代法制史研究会編『日本近代国家の法構  
造』木鐸社、1983年、449-479
- 瀧井一博『伊藤博文』中央公論新社、2010年
- \* D・シェーフォルト、大野訳「自治行政論」『多層的民主主義の憲法理論』風行社、  
2009年
- \* 長井利浩『井上毅とヘルマン・ロエスラー』文芸社、2012年
- \* 海老原明夫「ロエスレル」『ジュリスト』1155号、1999.5、pp. 39-41
- \* 渡辺高吉『明治国家形成と地方自治』吉川弘文館、2001年
- \* 稲永祐介「大正青年団における公德心の修養」慶應義塾福澤研究センター『近代日本研  
究』No. 22（2005）、p. 163-193
- \* 稲永裕介『憲政自治と中間団体 一木喜徳郎の道義的共同体論』吉田書店、2016年

第5章について、以下を追加

- \* 有賀長雄『国家学』牧野書房、1889年、近デ
- \* 同『帝国憲法篇』式書房、1889年、近デ
- \* 同『帝国憲法講義』講法会出版、1898年、近デ
- \* 高田早苗『国家学原理』早稲田大学出版部、1905年、近デ
- \* 高見勝利「講座担任者から見た憲法学説の諸相」2001年、『北大法学論集』52（3）1-  
38頁
- \* 野崎敏郎「カール・ラートゲンとその同時代人たち」1999年、『仏教大学 社会学論  
集』33、17-34
- \* 小島和司「明治憲法起草における地方自治」『明治典憲体制の成立』木鐸社、1988年、  
329以下

- \*宮平真弥「一木喜徳郎の自治観と沖縄調査」『沖縄文化研究』法政大学、26、341-378, 2000年
- \*西村清貴「パウル・ラーバントの国制論」2008年『早稲田法学会誌』58(2)、413-453
- \*栗城壽夫『一九世紀ドイツ憲法理論の研究』信山社、1997年
- \*夜久仁「予算と法律の関係」『レファレンス』2010.12
- \*岩村等「一木喜徳郎の法律概念」日本近代法制史研究会編『日本近代国家の法構造』木鐸社、1983年、405-426
- \*坂井大輔「穂積八束の『公法学』」(1) (2・完)、2013年『一橋法学』12(1)、231-265 ; 12(2)、93-165
- \*澤井啓一『山崎闇齋』ミネルヴァ書房、2014年
- \*小島毅『増補靖国史観』ちくま学芸文庫、2014年
- \*渡辺浩『日本政治思想史』東京大学出版会、2010年
- \*米原謙『国体論はなぜ生まれたか』ミネルヴァ書房、2015年
- \*甲斐高『江戸幕府と儒学者』中公新書、2014年
- \*Noriko Kokubun, Die Bedeutung der deutschen für die japanische Staatslehre unter der Meiji-Verfassung, Peter Lang, 1993, S. 179ff.
- \*五味良彬「大正後期から昭和初期における上杉慎吉ー「高天原」のユートピアー」(法政大学大学院法学研究科2014年度修士論文)。上杉については、同論文(と執筆過程の演習での同氏の発言や文献の紹介)に多くをおっている。
- 稲永裕介『憲政自治と中間団体 一木喜徳郎の道義的共同体論』吉田書店、2016年は立憲主義と報徳思想を天皇と国民個々の活動を中間団体自治を媒介に「協働国家」論として包括的に捉える。
- \*國學院大學研究開発推進センター編、阪本是丸責任編集『昭和前期の親等と社会』弘文堂、2016年
- \*松岡伸樹『審級大全』六甲出版販売、2016年

第6章について、以下を追加

- \*石田穰、「法典編纂と近代法学の成立」『民法学の基礎』、有斐閣、1976年
- \*石部雅亮、「いわゆる「法典論争」の再検討」法学雑誌第39巻第3・4号、1993年
- \*磯村保、「鳩山秀夫「債権法に於ける信義誠實の原則」加藤雅信他編『民法学説百年史』、三省堂、1999年
- \*井上琢也、「アントン・フリードリヒ・ユスティス・ティボー」勝田有恒・山内進編著『近世・近代ヨーロッパの法学者たち』、ミネルヴァ書房、2008年
- \*大久保輝、「民法起草者の考え方の違いについて」中央学院大学法学論叢第26巻第1・2号、2013年
- \*岡孝、「法典論争から明治民法成立・注釈時代」水本浩・平井一雄編『日本民法学史・

通史』、信山社、1997年

\*坂井大輔、「穂積八束の『公法学』(1)」一橋法学第12巻第1号、2013年

\*高田晴仁、「『商法典』とは何か」岩谷十郎他編『法典とは何か』慶応義塾大学出版会、2014年

\*高見勝利、「講座担任者から見た憲法学説の諸相」北大法学論集第52巻第3号、2001年

\*手塚豊、『明治史研究雑纂 手塚豊著作集第10巻』、慶應通信、1994年

\*長谷川正安、「判例研究の歴史と理論」長谷川正安編『法学の方法』、学陽書房、1972年

\*平野俊彦、「自由法運動」『現代法哲学2 法思想』、東京大学出版会、1983年

\*穂積重行、「明治10年代におけるドイツ法学の受容」家永三郎編『明治国家の法と思想』、御茶の水書房、1966年

\*松本尚子、「歴史法学派」勝田有恒他編著『概説西洋法制史』、ミネルヴァ書房、2004年

\*ハンス・ケルゼン『ハンス・ケルゼン著作集4』慈学社、2009年

\*Friedrich Carl von Savigny, Anton Friedrich Justus Thibaut, Thibaut und Savigny Ihre programmatischen Schriften, Verlag Franz Vahlen GmbH, 2002

第7章について、以下を追加

\*大塚仁、『刑法における新・旧両派の理論』、日本評論社、1957年

\*小野修三、『監獄行政官僚と明治日本』、慶応義塾大学出版会、2012年

\*川口由彦、『日本近代法制史 第2版』、新世社、2015年

\*荘子邦雄、『近代刑法思想史序説』、有斐閣、1983年

\*手塚豊『明治史研究雑纂 手塚豊著作集第10巻』、慶應通信、1994年

\*西原春夫、「刑法制定史にあらわれた明治維新の性格」、比較法学第3巻第1号、1967年

\*本田稔「刑法のイデオロギー的基礎と法学方法論」立命館法学2012年第4号

\*山口邦夫『19世紀ドイツ刑法学研究 復刻版』、尚学社、2009年

\*吉永圭「小野清一郎における法思想と仏教思想」大東法学 29 巻 1 号、2019 年

第8章について、以下を追加

\*赤木登代「ドイツ第一波女性運動における女子教育(第I報)」、大阪教育大学紀要 第I部門 第55巻第2号、2007年

\*大河内一男「労働運動史上における高野房太郎」『大河内一男集 第8巻』、労働旬報社、1981年

\*大竹弘二、「シュミット」『国家と社会 岩波講座政治哲学4』、岩波書店、2014年

\*小貫幸浩、「『法の純粹理論』と『民主制の擁護』の間」DAS研究会編『ドイツ公法理論の受容と展開』、尚学社、2004年

- \* 荻部直、「大正グローバリゼーションと「開国」」、思想No.1020、2009年
- \* 河上婦志子、『二十世紀の女性教師』、お茶の水書房、2014年
- \* 今野元、「吉野作造のドイツ留学（1）」、愛知県立大学大学院国際文化研究科論集第11号、2010年
- \* 史洪智、「日本人法学者と清朝末期の政治外郭」、荒武賢一郎、宮嶋純子編『近代世界の「言説」と「意象」』、関西大学文化交渉学教育研究拠点、2012年
- \* 立花隆『天皇と東大1』、文藝春秋、2012年
- \* 長尾龍一、「カール・シュミット伝」『シュミット著作集1』、慈学社、2007年
- \* 長尾龍一、『法学に遊ぶ 新版』、慈学社、2009年
- \* 林茂、『近代日本の思想家たち』、岩波書店、1958年
- \* 森まゆみ、『『青鞥』の冒険』、平凡社、2013年
- \* らいてう研究会、『『青鞥』の人物事典』、大修館書店、2001年
- \* 渡邊澄子、「『青鞥』運動史」、新・フェミニズム批評の会編『『青鞥』を読む』、学芸書林、1998年
- \* アンドリュー・ゴードン、「日本近代史におけるインペリアル・デモクラシー」『年報日本現代史第2号 現代史と民主主義』、東出版、1996年
- \* Mary Lyndon Shanley, *Feminism, marriage, and the Law in Victorian England*, Princeton UP, 1989

第9章について、以下を追加

- \* 内田博文、『日本刑法学のあゆみと課題』、日本評論社、2008年
- \* 久保敬治、『新版 ある法学者の人生 フーゴ・ジンツハイマー』、信山社、2001年
- \* 渋谷謙次郎、「パシュカーニス法理論の再検討（1）」、神戸法学雑誌第62巻第1・2号、2012年
- \* 菅沼隆、「昭和恐慌期の貧困救済」歴史評論No. 719、2010年
- \* 関口安義、『恒藤恭とその時代』、日本エディタースクール出版部、2002年
- \* 竹中佳彦、『日本政治史の中の知識人（上）』、木鐸社、1998年
- \* 西谷敏、「労働法学」日本労働研究雑誌No. 621、2012年
- \* 西谷敏、『ドイツ労働法思想史論』、日本評論社、1987年
- \* 日本労働法学会編『現代労働法講座第1巻 労働法の基礎理論』、総合労働研究所、1981年
- \* 原秀男、「新カント学派」野田良之・碧海純一編『近代日本法思想史』、有斐閣、1979年
- \* 広川禎秀、『恒藤恭の思想史的研究』、大月書店、2004年
- \* 藤木貴史、「フーゴ・ジンツハイマーの従属労働論」一橋研究第37巻第2号、2012年
- \* 藤田勇編『マルクス主義法学』、学陽書房、1973年

- \*松尾敬一、「法曹社会主義」尾高朝雄・峯村光郎・加藤新平編『法哲学講座 第四卷』、有斐閣、1957年
- \*渡辺洋三、『法社会学とマルクス主義法学』、日本評論社、1984年
- \*アルトゥール・カウフマン（中義勝・山中敬一訳）、『グスタフ・ラートブルフ』、成文堂、1992年
- \*ミヒャエル・ハインリッヒ（明石英語人他訳）、『『資本論』の新しい読み方』、堀之内出版、2014年
- \*『マルクス＝エンゲルス全集第35巻』、大月書店、1974年

第10章について、以下を追加

- \*石本泰雄、「戦争と現代国際法」星野安三郎編『法と平和』、学陽書房、1973年
- \*伊藤不二男、「刑罰戦争の観念とその理論の形成について」法文論叢第3号、1952年
- \*大久保泰甫、『ボワソナアド』、岩波書店、1977年
- \*大竹弘二、『正戦と内戦』、以文社、2009年
- \*大島英樹、「現実主義」有賀貞ほか編『講座国際政治1』、東大出版会、1989年
- \*大沼保昭、『国際法 新訂版』、東信堂、2008年
- \*角松生史、「空間の秩序づけ」納富信留、溝口孝司編『空間へのパースペクティブ』、九州大学出版会、1999年
- \*古賀幸久、『イスラム国家の国際法規範』、勁草書房、1991年
- \*佐谷眞木人、『民俗学・台湾・国際連盟』、講談社、2015年
- \*新藤栄一、『現代国際関係学』、有斐閣、2001年
- \*竹島博之、『カール・シュミットの政治』、風行社、2002年
- \*田畑忍編著、『近現代世界の平和思想』、ミネルヴァ書房、1996年
- \*筒井若水「ケルゼン理論と現代国際法学」鶴飼信成、長尾龍一編『ハンス・ケルゼン』、東大出版会、1974年
- \*手塚豊、『明治史研究雑纂 手塚豊著作集第10巻』、慶應通信、1994年
- \*西平等、「戦争概念の転換とは何か」『国際法外交雑誌』104巻4号、2006年
- \*牧野雅彦「カール・シュミットの国際連盟批判」思想No. 1050、2011年
- \*松井芳郎、「日本軍国主義の国際法論」東京大学社会科学研究所「ファシズムと民主主義」研究会編『戦時日本の法体制』、東大出版会、1979年
- \*宮下豊、『ハンス・J・モーゲンソーの国際政治思想』、大学教育出版、2012年
- \*山内進、「グロティウスと20世紀における国際法思想の変容」一橋大学法学部創立50周年記念論文集刊行会編『変動期における法と国際関係』、有斐閣、2001年
- \*吉田脩「ハンス・ケルゼンの根本規範論考」筑波法政第44号、2008年
- \*吉田脩、「ハンス・ケルゼンとカール・シュミット」『法の理論 29』、成文堂、2010年

\*Jochen von Bernstorff, The Public International Law Theory of Hans Kelsen, Cambridge UP, 2010

\*Stephen C. Neff, Justice among Nations: A History of International Law, Harvard University Press, 2014

\*Kenneth Thompson and Robert J Myers(ed.), Truth and Tragedy, Transaction Pub, 1983

第三部全体について、以下を追加

\*米山忠寛『昭和立憲制の再建 1932-1945年』千倉書房、2015年

\*伊藤隆『昭和十年代史断章』東京大学出版会、1981年

\*井上寿一『戦前昭和の国家構想』講談社選書メチエ、2012年

\*小林直樹他編『現代日本の法思想 近代法100年の歩みに学ぶ』有斐閣叢書、1976年

\*白井聡『永続敗戦論 戦後日本の核心』大田出版、2013年

\*伊藤隆『昭和史をさぐる』吉川弘文館、2014年

\*鈴木安蔵編『日本の憲法学—歴史的反省と展望—』評論社、1968年

\*鈴木安蔵『憲法学三十年』評論社、1967年

\*筒井清忠『昭和戦前期の政党政治—二大政党制はなぜ挫折したのか』筑摩新書、2012年

\*筒井清忠編『昭和史講義—最新研究で見る戦争への道』筑摩新書、2015年

\*筒井清忠編『新昭和史論—どうして戦争をしたのか』ウエッジ、2011年

\*筒井若水他『日本憲法史』東京大学出版会、1976年

\*成田龍一『近現代日本史と歴史学 書き替えられてきた過去』中公新書、2012年

\*中村隆英『昭和史(上)』東洋経済新報社、2012年

\*中村隆英『昭和史(下)』東洋経済新報社、2012年

\*日本評論社編集局『日本の法学 回顧と展望』日本評論社、1950年

\*長谷川正安『昭和憲法史』岩波書店、1961年

\*藤原彰他『天皇の昭和史(新装版)』新日本出版社、2007年

\*保阪正康『昭和史のかたち』岩波新書、2015年

第11章について、以下を追加

\*小野川秀美「日本およびロシアの初期社会主義」『ブルジョア革命の比較研究』、1964年、筑摩書房

\*筧克彦『古神道大義』清水書店、1912年

\*片山杜秀『近代日本の右翼思想』講談社選書メチエ、2007年

\*片山杜秀『未完のファシズム—「持たざる国」日本の運命』新潮選書、2012年

\*昆野伸幸「日本主義と皇国史観」『日本思想史講座4—近代』ぺりかん社、2013年

\*呉豪人「植民地の法学者達—「近代」パライソの落とし子」『「帝国」日本の学知第1

- 卷 \* 「帝国」編成の系譜』岩波書店、2006年
- \* 長尾龍一「法思想における「国体」論」『近代日本法思想史』有斐閣、1979年
  - \* 橋川文三『昭和ナショナリズムの諸相』名古屋大学出版会、1994年
  - \* 橋川文三『昭和維新試論』講談社学術文庫、2013年
  - \* 坂野潤治『明治デモクラシー』岩波新書、2005年
  - \* 坂野潤治、田原総一郎『大日本帝国の民主主義——嘘ばかり教えられてきた！——』小学館、2006年
  - \* 土方和雄「日本型ファシズムの擡頭と抵抗」『近代日本社会思想史Ⅱ』有斐閣、1971年
  - \* 福家崇洋『日本ファシズム論争——大戦前夜の思想家たち』河出書房新社、2012年
  - \* 松尾尊允『大正デモクラシーの群像』岩波書店同時代ライブラリー、1990年
  - \* 宮本盛太郎『天皇機関説の周辺 三つの天皇機関説と昭和史の証言』有斐閣選書、1980年
  - \* 山口定『ファシズム』岩波現代文庫、2006年
  - \* 蠟山政道『日本における近代政治学の発達』実業之日本社、1949年

第12章について、以下を追加

- \* 空井護「政党否定論者としての美濃部達吉」『法学』67巻2号、2003年
- \* 鳥海靖「明治立憲制の理解と評価をめぐって——研究動向と問題点」『日本近代史講義 明治立憲制の形成とその理念』東京大学出版会、1988年
- \* 西村裕一「憲法 美濃部達吉と上杉慎吉」『近代日本政治思想史 荻生徂徠から網野善彦まで』ナカニシヤ出版、2014年
- \* 針生誠吉「天皇制ファシズムの展開と完成・崩壊——「国体の本義」と憲法学——『現代憲法大系1 国民主権と天皇制』法律文化社、1983年
- \* 坂野潤治『近代日本の国家構想—1871-1936』岩波現代文庫、2009年
- \* 尾藤正英「日本史上における近代天皇制」『江戸時代とはなにか』岩波書店、1992年
- \* 尾藤正英「天皇機関説事件のトリック」『日本の国家主義 「国体」思想の形成』岩波書店、2014年
- \* 松本清張『昭和史発掘6』文春文庫、1978年
- \* 三谷太郎「天皇機関説事件の政治史的意味」『近代日本の戦争と政治』岩波書店、1997年
- \* 宮沢俊義・小林直樹「明治憲法から新憲法へ」『昭和思想史への証言 改訂新版』毎日新聞社、1972年
- \* 望月幸男「日本とプロイセンにおける欽定憲法体制の保守的護教論」『ブルジョア革命の比較研究』、1964年、筑摩書房

第13章について、以下を追加

- \* 石川健治「コスモス—京城学派公法学の光芒」『「帝国」日本の学知第1巻 「帝国」編成の系譜』岩波書店、2006年
- \* 伊藤隆『大政翼賛会への道 近衛新体制』講談社学術文庫、2015年
- \* 奥平康弘「治安維持法の思想」『現代日本の法思想 近代法100年の歩みに学ぶ』有斐閣叢書、1976年
- \* 金昌禄「尾高朝雄と植民地朝鮮」『帝国日本と植民地大学』ゆまに書店、2014年
- \* 黒田覚「カール・シュミット」『廿世紀思想8 全体主義』河出書房、1939年
- \* 小路田泰直『国家の語り方——歴史学からの憲法解釈——』勁草書房、2006年
- \* 田畑忍『佐々木博士の憲法学』一粒社、1964年
- \* 増田知子「立憲制」の帰結とファシズム』『日本史講座第9巻 近代の転換』東京大学出版会、2005年
- \* 水谷三公『＜日本の近代13＞官僚の風貌』中央公論新社、1999年

第14章について、以下を追加

- \* 今井隆太「国民精神文化研究所における機器の学問的要請と応答の試み 藤澤親雄・大串兎代夫・作田荘一・河村只雄」『ソシオサイエンス』7号、早稲田大学大学院社会科学研究科、2001年
- \* 大串兎代夫『国家権威の研究』高陽書院、1941年
- \* 大塚桂『大東亜戦争期の政治学』成文堂、2007年
- \* 尾高朝雄『実定法秩序論』岩波書店、1942年
- \* 尾高朝雄「国家に於ける法と政治」『京城帝国大学法学会論集』7巻、1934年
- \* 尾高朝雄「法における政治の契機」『法律時報』15巻10号、1943年
- \* 黒田覚「日本的議会の創建」『改造』24巻6号、1942年
- \* 小林直樹『国家緊急権』学陽書房、1979年
- \* 駒込武他『戦時下学問の統制と動員 日本諸学振興委員会の研究』東京大学出版会、2011年
- \* 堺屋太一「日本が選んだのは官僚統制と「昭和十六年体制」」『東大講義録——文明を解く——』講談社、2003年
- \* 宮本盛太郎「大串兎代夫と日本国家学」『知識人と西欧（第二版）』蒼林社出版、1983年

第15章について、以下を追加

- \* 雨宮昭一『戦時戦後体制論』岩波書店、1997年
- \* 江藤淳『忘れたことと忘れさせられたこと』文春文庫、1996年
- \* 江藤淳「“八・一五革命説” 成立の事情——宮沢俊義教授の転向」『諸君』14巻6号、1982年

- \*尾高朝雄『法の窮極に在るもの（新版）』有斐閣、1955年
- \*尾高朝雄『法の窮極にあるものについての再論』勁草書房、1949年
- \*小畑郁「日本の管理占領と「革命」に対する官僚法学的対応——第二次世界大戦直後における国際法上位一元論の機能——」『思想』2009年4月号（第1020号）、2009年
- \*小関彰一『新憲法の誕生』中公文庫、1995年
- \*酒井哲哉「戦後外交論の形成」『戦争・復興・発展——昭和政治史における権力と構想』東京大学出版会、2000年
- \*田中二郎「日本管理法令と国内法」『日本管理法令研究』第一巻第一号、1946年
- \*美濃部達吉『新憲法逐条解説』日本評論新社、1947年
- \*宮沢俊義『転回期の政治』中央公論社、1936年
- \*八木秀次「美濃部達吉の明治憲法改正消極論——戦後の美濃部達吉——」『早稲田政治公法研究』35巻・37巻、1991年
- \*安井郁「連合国の日本占領の本質」『国際法外交雑誌』45巻1号2号、1946年
- \*横田喜三郎「日本の法的地位」『日本管理法令研究』第一巻第一号、1946年
- \*横田喜三郎「日本管理の基本方式」『日本管理法令研究』第一巻第一号、1946年
- \*横田喜三郎「無条件降伏と国体」『国際法外交雑誌』45巻1号2号、1946年
- \*横田耕一「制憲前後の天皇像——象徴天皇制の解釈による”連続性”と”断絶性”序説——」『法政研究』45巻1号、1978年